

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

死に対する正しい理解の深化とともに、とどのつまりは、生をよりよく充実させることが肝要であるとの自覚が高まる。生をよりよくせずして、どうして死を意義あらしめることができるか、との自覚である。

かの孔子は門人の子路が死を問うたのに対して、「生についてまだよく分かっていないのに、死のことが、どうして分かるものか」と答えた。これは死のこと、死後のことをとやかく心配するよりも、生きている今のことに配慮せよと子路を戒めたものと思われる。

「人が生命を大切にすぎで、そのためかえって死地に赴くような結果になる」と、かの老子も注意をうながしている。『老子』第五十章には「人の生生、動いて死地に之く。……其の生生の厚きを以てなり」とある。またその第七十六章には「柔弱なる者は、生の徒なり」と述べてある。

万物草木の生じるときは柔らかであるように、柔らかで弱いように見えても、そうしたものは生々としている。「其の死するや枯槁なり」で、かたく、こちこちしているのと死に至る。富貴や名声にあくせくして、欲に固まるのは死期を早めるようなものだ、と老子は警告しているものと思われる。孔子と老子の説は反対のようであるが、



「今」の充実

丸山竹秋

死よりも生を重んぜよとするのと、その生にこだわるなどすると、矛盾しているわけではない。生のあり方を説き、あるいは生への偏りを戒めるなど、その趣が異なるだけである。ただ両者とも、死後のことを探究はしていない。「死そのものを考えるというのではなく、生に連なる死に対して、どのように対処して生きていくかということに、重点がおかれている」のが老子の思想である。

莊子は、昼と夜とが自然にあるように、人に生死があるのは、自然であるとして「昔の奥義を悟った人（真人）は、生を喜ぶことも知らず、死を憎むことも知らなかった。生まれてきたからといって喜ぶわけではないし、死ぬるに際しても嫌がらず、自然にまかせて行き来していた」と説いた。ただここにも、死についての詳しい探求はなく、現実の生に対する片寄らない自然のあり方が説かれている。

死を探究する自分も「今」においてある。まさに死にかけているとするその自分さえも、「今」にある。過去も未来も現在に集結され、集中され、現在を拠点とし、現在に基礎を置く。現在を離脱したり、切断したりしての過去論争、未来思索は無意義である。死をよりよく充実せしめるには、今の生をよりよく充実せしめることが基盤となる。

死と生は裏腹のものである。いつも同居している。「今」を充実して生きれば、死もまた充実する（『生と死の妙境』より）。